

ラッセルの「感覚与件」に就いて

西川竹彦*

Takehiko NISHIKAWA : On Bertrand Russell's Sense-Data

(1)

「この世に、物の道理のよく判る人が疑い得ない確実な知識があるだろうか。(1)これはバートランド・ラッセルが彼の著「哲学の諸問題」(The Problems of Philosophy)の冒頭で述べている言葉である。嘗て、ルネ・デカルト(René Descartes, 1596—1 50)が真であることが「明晰判明」(clear and distinct)でないような一切のものを信じまいとした「方法的懐疑」(Doute methodique)の態度にもよく似た態度を以て、ラッセルも亦一切のものに批判的であろうとする。しかし、デカルトが凡そ疑い得るすべてのものを疑い、その懐疑の果てに探求の確実なる基礎を彼自身の「思惟する自我」(Cogito)に求めて行つた行き方に、ラッセルは必ずしも同調してはいないようである。「私は考える。それ故に、私は存在する」(Cogito, ergo sum)というデカルトの命題は、厳密な意味でそれが確実であるという以上のことを示唆しているからである。今日存在している私と昨日存在した私とが同一の私であるということは、常識的には全く確実であると信ぜられてはいても、今少し厳正な批判を加える時、このような実在する「自我」(Self)というものは、実在する「物的対象」(physical object)と同様極めて捉えがたき対象であり、どうしてもその存在を信ぜずにはいられない程、明晰判明な絶対的確実性を有するものとは俄かに断じがたいように思われるからである。つまりデカルトの場合、彼の命題 Cogito, ergo sum には実体としての自我が、昨日も今日も亦明日も持続して存在するであろう自我が暗々裡に前提されて居り、この実体としての自我に関する説明が論理的になされざる限り Cogito, ergo sum の確実さは未だ完全だとはいい難いからである。これが自らを屢々デカルトに比較しながらも Cogito, ergo sum に知識再建の最後の拠点を求めて行つたデカルトに、ラッセルが必ずしも同調しない第一の理由である。更に今一つラッセルがデカルトを高く評価しているにも拘らず、デカルトに必ずしも

組みしない理由が考えられる。それはラッセルとデカルトとの立場上の相違にも起因することであろうが、ラッセルはデカルトの主張するが如き「方法的懐疑」の方式そのものに強く批判的であるからである。

周知の如く「科学哲学」(scientific philosophy)を標榜するラッセルの認識論上の立場は、在来の経験論が主張するが如き一切の認識を、経験論一辺倒で処理しようとする極端なものではないにしても、彼も亦何等かの意味に於いて認識が経験に由来し、経験に機縁を持つと主張する点では、明かにイギリス経験論の伝統の上に位置しているからである。従つて一方ではすべての知識が何等かの意味で経験に由来し、経験に機縁を持つことを主張しながらも、他方に於いてはこれを組織的に疑うということは彼の立場上決して許され得ることではないからである。これがラッセルをしてデカルトの「方法的懐疑」の方式そのものに批判的たらしめている第二の理由である。我々が共通に所有している日常的な知識のすべてに対して疑惑を懐きながら、尙且つこれを哲学が成り立つための前提として用いなければならぬということは明かに矛盾でなければならぬであろう。今若し我々が強いて日常的な常識的知識の全体に対して批判的たらんと欲すれば、我々はいきおいこの常識的知識を批判すべき規準ともなるべき知識を、日常的な常識的知識以外に持ち得ていなければならず、かくる「外的規準」(external criterion)たるべき知識なくして常識的知識のすべてに批判的たらんと欲しても、それは望むべくして望み得ぬことではあるまいか。それとも我々には経験以外に「起源」(source)を持つ知識が果して与えられているのだろうか。かく主張しつつ、ラッセルは日常的な常識的知識の全体に批判的たらんとするデカルト的な行き方を捨てて、日常的な諸確信のうちどれが確実な確信であり、どれが誤れる確信であるかを確めんとする「細部批判」(criticism of details)の方式へと赴くのである。

* 信州大学繊維学部哲学研究室

しかしラッセルが「細部批判」の方式を主張するとは

いえ、恰かもデカルトに「思惟する自我」という最後の確乎たる足場があつた如く、ラッセルにも亦「細部批判」に必要な確実にして強固な最後の足場がなければならぬように思われる。この確実にして強固な最後の足場とはラッセルにとつて何であつたらうか。ラッセルが「感覚与件」⁽⁴⁾ (sense-data) と呼んでいるものこそ、彼にとつての確実にして強固な最後の足場なのである。

(1) B. Russell : The Problems of Philosophy, London and New York, 1951, P. 7.

(2) B. Russell : Our Knowledge of The External World, Chicago and London, 1929, P. 71.

(3) ibid., P. 71.

(4) B. Russell : The Problems of Philosophy, P. 12 (2)

彼はこの「感覚与件」という語を感覚によつて知られるところのもの、つまり我々の直接経験に於いて我々の感覚にちかに与えられるところのものゝ義に使用している。例えば前掲の「哲学の諸問題」に於いて「私達が色を見る場合私達は必ず色の《感覚》(sensation)を持つ。然し色そのものは感覚にちかに与えられているところのもの、即ち《感覚与件》(sense-data)であつて、感覚ではない。色は私達がそれを直接意識しているところのものであるが、この色の意識そのものは感覚である」⁽¹⁾と彼が言っているが如く、「感覚与件」とは「感覚によつてちかに捉えられた対象」⁽²⁾ (immediate objects of sense) であり、我々の視覚、聴覚、触覚等の感覚を通じて経験された「直接的事実」⁽³⁾ (the immediate fact) そのものであるといえよう。しかもラッセルの場合、この「感覚与件」は彼の哲学研究の強固なる最後の足場として、又「絶対に確実なる」⁽⁴⁾ (absolutely certain) 素材として、仮令「物的対象」の存在は疑い得ても、この「感覚与件」の存在のみは疑わんとして疑い得ない確実なるものと見做されているのである。

由来哲学は「感覚的世界の実在性」(the reality of the world of sense) を疑い、これを否定することによつて真知に至るのが常道であつた。印度の神祕主義然り、パルメニデス (Parmenides, B. C. 541-x) 以後のギリシャ哲学及び近代の一元論哲学並びにバークレ (Berkeley, 1685-1753) の哲学皆然りである。これらの哲学に於いては何れも感覚的世界の「可感的な現象」(sensible appearance) はその変化と多様性の故に疑われ非難されたのであつた。例えば神祕主義者にあつては現象の背後に横たわる、より真実なより意味のある世界

に関する「直接的知識」(immediate knowledge) を根拠として、現象界の虚偽性が論難されたし、パルメニデスやプラトーン (Plato, B. C. 477-347) にあつては、現象界の不断の変化流転は論理分析の結果明かにされる「抽象的実体」(the abstract entities) の不変性 (the unchanging nature) と相対立せざるが故に、感覚的世界は仮象として拒否されたのであつた。又バークレの場合にあつても、感覚的世界は「観察者の身体と観点」⁽⁵⁾ (the organization and point of view of the spectator) に依存する主観的なものであることが指摘され、その故に感覚的世界の実在性は否定されたのであつた。何れにしても、感覚的世界は虚偽に充ちた当てにならぬ仮象の世界であるという点では、これら在来の哲学者達の学説は皆一致していたといつてよい。

然るに如上の如くラッセルにあつては、在来の哲学が非難し当てにしなかつたその感覚的世界から彼の哲学を將に始めようとしているのである。しかも彼の場合、最も「堅固な基礎」(solid basis) が其処に据えられているといつてよい。何故に、然らば「感覚与件」とはかくも彼の哲学研究に於いて堅固な足場であり、又確実な素材たり得るのであろうか。「バートランド・ラッセルの外的世界の構成」(Bertrand Russell's Construct of The External World) と題する著書の中で、シ・エイ・フリッツ (C. A. Fritz) はラッセルの「感覚与件」を批評し「ラッセルは我々の直接経験のうち或るものは《絶対に確実なるもの》と呼んでいるが、これは命題が確実であり、絶対的に真であるという意味で「感覚与件」それ自身が確実であるというのではない。「感覚与件」の確実さは寧ろそれが《將に存在している》(just are) という意味で疑い得ないのである」⁽⁶⁾と。ラッセル自身も彼の「外的世界の知識について」(Our Knowledge of The External World) の中で、物的対象の存在に関しては、兎に角我々はそれが何等かの形で論証されねばならぬことを感ずるにしても「少くとも immediate objects of sense に関してのみは、その必要を聊かも感じないのである。immediate objects of sense は厳としてそこに《存在》(are) しているのであつて、その《瞬間的な存在》(momentary existence) に関する限り、最早やそれ以上の論証の必要を聊かも感じないのである」⁽⁷⁾といつている。つまりラッセルのいう sense-data の確実さとは、我々の感覚によつてちかに捉えられた対象が、其処に「將に存在している」という、その対象の momentary existence に関する限り「自明」(self-

evident)にして疑い得ないということであろう。

然し「感覚与件」の確実さが、感覚的に捉えられた対象の momentary existence に関する限り自明であるという点にあるにしろ、その自明さは論理的諸原理が自明であるという意味での自明さとは自ら異なるであろう。論理的諸原理の自明さは、勿論それが論理的に自明であるという点にあるのだが、「感覚与件」の自明さはラッセルも指摘している如く、それが心理学上「原初的」(primitive)⁽⁸⁾であるという意味での自明さでなければならぬであろう。謂わばそれが未だ如何なる意味に於ても「推理」や「解釈」の媒介を経っていないという意味で「原初的」であり、従つて又「自明」であるということではなければならぬであろう。即ち、聊かも主観を交えずに、ありのままに対象を受容しているという意味で sense-data は心理学上 primitive であり、self-evident でなければならぬのである。ラッセルは「sense-datum」は《確信》(beliefs)や《意欲》(volitions)の如く主観を含んではいない。sense-datum の「存在」(existence)は、論理的には主観の「存在」(existence)とは何等関係のないものである⁽⁹⁾として、sense-datum の対象性を強く主張しているのである。

然し、かゝる見解に対しては必ず又「感覚与件」は主観的なものであるという反駁がなされるであろう。何故ならば、第一に「感覚与件」は人毎に異なるものである。例えば同じ対象でも、Aの人の視覚に直接現われるものは、Bの人の視覚に直接現われるものではない。対象は見る人の観点に依つて多少にも拘らず必ず異なるものであるし、又第二に「感覚与件」は感官・神経・頭脳等の生理的な働きを無視しては到底考え得られぬものだからである。しかし、かゝる「感覚与件」が主観的なものであるという見解に対して、ラッセルは次の如く答えているのである。「sense-data が《心的》(mental)であるという見解は疑いもなく、一部分は sense-data が《生理学的主観性》(physiological subjectivity)を持つ所から起つた誤解であり、他の一部分はそれが感覚と混同されて誤り考えられたからである」⁽¹⁰⁾と。

従つて、若し「感覚与件」と感覚との区別が明瞭になされるならば、一般に信ぜられている「感覚与件」の主観性なるものが、実は「心理的」(psychical)なものではなくして、「生理学的」(physiological)なものであり、感官・神経・頭脳等の生理学的条件に「因由」(causal dependence)したものであることが理解されねばならぬであろうと。所で「感覚与件」が決して感覚と同

一ならざること、前掲のラッセルの引用文によつても明かであつて、「感覚与件」は感覚が直接的に受容した対象、例えば我々が見る「色」そのものがそれであり、感覚はその場合この色についての「意識」のことであつた。それ故「感覚与件」に仮令感官・神経・頭脳等の働きが見られようとも、それ等の働きは一般に信ぜられている如く psychical な意味での主観性と見らるべきものではなく、physiological な意味での主観性と見らるべきものであつて、それは恰かも認識主観と肉体とが同一でないと同様全く区別して理解するべきものである。換言すれば「感覚与件」は飽迄も「感覚の直接的対象」であり、我々の直接経験した「直接的な事象」であつて、そこには所謂主観的な雑物が聊かも混入されていないのだというのが、ラッセルの言わんとする主張の骨子である様に思われる。

- (1) B. Russell : The Problems of Philosophy, P. 12.
- (2) B. Russell : Our Knowledge of The External World, P. 68. ff.
- (3) ibid, P. 72. ff.
- (4) B. Russell : The Problems of Philosophy, P. 17.
- (5) B. Russell : Our Knowledge of The External World, P. 67.
- (6) C. A. Fritz : Bertrand Russell's Construction of The External World, P. 80.
- (7) B. Russell : Our Knowledge of The External World, P. 75.
- (8) ibid. P. 72. ff.
- (9) B. Russell : Mysticism and Logic, P. 152.
- (3) ibid. P. 152.

(3)

然し、若しラッセルの主張するが如く「感覚与件」が psychological に primitive であり、如何なる意味に於いても推理や解釈の加味されていない the immediate objects of sense だとすれば、我々は「感覚与件」が psychical にはではなく、psychological に primitive であるという理由に基いて「感覚与件」は何時如何なる場合にも確実にして、対象を在りの儘に我々に伝えているものと考へて差支えないものであろうか。

この点に関し、ラッセルは「感覚に實際的に与えられている所のものの発見は異常に困難な問題である」⁽¹¹⁾ことを広く哲学研究一般の素材分析を行つている箇所を証

えているのである。彼の其処でいわんとしていることは恐らく我々に sense-data として与えられている所のものが、果してまがう方なき immediate fact そのものであるか否かの吟味は、我々にとって極めて難しい問題たることを、示唆せんとしたものとと思われる。というのは、例えば我々の「空間知覚」(space-perception) に一例を取つて考えて見るならば、我々は我々が見ている通りのものを素直に見ている場合よりも、案外これに推理を働かせ、解釈を加えて見ている場合の方が遙かに多いということがいひ得るからである。

これは明かに所謂「観念聯合」(association of ideas) とか、或は「論理的過程以外」(extra-logical process) の、例えば心理的慣習に基づく一種の心理的推理とかいわれるべきものであつて、決して感覚の対象を real に受容しているとの意味での primitive であるとはいひ難いであろう。具体的に言えば、我々は通常物を見る場合、我々の見ている物の大きさや形状が、その物と我々との間の距離や我々の立つ観点などに関連して変化するものであるにも拘らず、我々は概して見える大きさ見える形状を見ずして、その物本来の real な大きさや real な形状を暗黙の裡に推理して眺めていることが案外多いし、又例えば他人の談話などに耳を傾けている場合にしても、我々は相手の語る言葉の大半はこれを聞き漏しているにも拘らず、尙その空響を無意識的な解釈で補填して辻褄を合せている場合が存外に多いからである。言い換えるならば、我々に感覚されたものと、我々が知覚したものとの間には「最初の感覚」⁽²⁾ (original sensation) には、受容されていなかった何物か、その知覚には付加されて意識されているという事実である。この事實は、凡らく我々に感覚されたものと我々が知覚したものとの間には、何等かの推理乃至は解釈が常に働いていることを雄弁に証立してゐると共に、我々の「感覚与件」の知覚が常に必ずしも直接的事実そのものを、real に我々に伝えているものでは決してないことを如実に物語つてゐるものだともいえよう。謂わば感覚された事実と知覚されたものとの内容とは常に必ずしも同一ではないということである。ラッセルの言葉を借るならば、感覚には何等推理や解釈の入り込む余地のないのに対し、「知覚は実に解釈によつて膨れ上つた感覚」⁽³⁾ (Perception is sensation expanded by interpretation) にも等しいものであるということである。従つて如上の点から見れば、彼の指摘する如く、我々の哲学研究の眞の素材たるにふさわしいものは、常に感覚に直接よるもののみであつて

知覚によるものは必ずしも我々の哲学研究のよき素材たり得ないということになるであろう。即ち我々の哲学研究の眞の素材たるにふさわしいものとは、知覚に於ける「最初の感覚」(original sensation) 謂わばその「感覚的核」⁽⁴⁾ (sensational core) ということになる。これがラッセルのいう我々の感覚に直接受容された対象、即ち「感覚与件」たることはいう迄もないことであろう。

(1) B. Russell : Our Knowledge of the External World, P. 73.

(2) C. A. Fritz : Bertrand Russell's Construction of The External World, P. 87. ff.

(3) B. Russell : Human Knowledge, P. 169.

(4) C. A. Fritz : Bertrand Russell's Construction of The External World, P. 87. ff.

(4)

以上我々は「感覚与件」なるものは、それが心理学上 primitive であればこそ確実なる素材たり得るのであつて、若し何等かの意味で推理や解釈がこれに挿し込まれている場合には、心理学上「派生的」(derivative) な素材として確実なる素材たり得ないことを知つたのである。しかし、このことは必ずしも「派生的」な素材のすべてが、眞の素材たり得ないことを意味するものではない。同じく「派生的」な素材にしても、それが「論理的推理」(logical inference) を経たるものである場合には、亦自ら問題が別であろう。つまり先の例に見る如く、厳密な論理的過程を経ざる謂わば「観念聯合」や「論理的過程以外」の心理的推理の場合の如き、心理学上 derivative な素材たる場合にのみ問題があるのである。

ラッセルはかゝる心理学上 derivative な素材を、特に「論理学上原初的」⁽¹⁾ (logically primitive) な素材と呼び、それが仮令心理学上では derivative と見做され得ても、論理学上から見れば何等厳正なる論理的過程も経ていない、極めて primitive な素材たることを明かにしているのである。従つて、かゝる素材はそれが何等厳正なる論理的過程も経ていないという意味で、哲学研究の手がかりとしての確実なる素材たるにはふさわしからぬものであることは、彼の言をまつ迄もなく明かなことである。彼はかゝる心理学上 derivative な素材、換言すれば論理学上極めて primitive な素材を「脆弱なる素材」⁽²⁾ (soft data) と呼び、心理学上 primitive にして自明な「感覚与件」や論理的諸原理の如き「強固なる素材」(hard data) と一応認識論的な区別を立ててい

るのである。

彼が、何故に、哲学研究の前提をなす素材分析に於いて、「強固なる素材」・「脆弱なる素材」というが如き認識論的な素材区分をなしたかについては、次の如き彼の説明にその理由を覗くことが出来る。彼に依れば、元来我々の厳正なる批判的反省というものは、批判されるべき対象が疑わしきものである場合には疑わしきものに、誤れるものである場合には誤まれるものに溶解せしめる力を持つているが故に、かゝる「批判的反省の溶解力」⁽⁴⁾

(the solvent influence of critical reflection)に頑固な抵抗を示す素材こそ、それ自ら確実にして「強固なる素材」たることを立証していると共に、かゝる「批判的反省の溶解力」に抵抗しきれず、自らを疑わしきもの又は誤まれるものとして露呈せしめる素材は、それ自身「脆弱なる素材」たることを立証しているものなのである。つまり如何に吟味・穿さくを加えようとも崩れぬどころか、益々確実なることの明かになるが如き素材が「強固なる素材」であり、かゝる吟味・穿さくにその確実ならざることを益々明かにするが如き素材は「脆弱なる素材」だというのである。

素材は、彼の強調する如く哲学研究の「前提」(premiss)である。彼が自らをデカルトに比肩しつつ素材分析に専念する所以も、又凡らく此処にあるのである。然し彼のいう「強固なる素材」は単に「感覚与件」や「論理的諸原理」のみに止つてはない。彼は「強固なる素材」の中でも「最も強固なるもの」(the hardest)⁽⁴⁾として、今述べた「感覚与件」と「論理的諸原理」を挙げ、更にこれに加うるに「若干の記憶の諸事実」(some facts of memory)及び「若干の内省的諸事実」と感覚的事実に含まれる「時間的・空間的諸関係」(spacial and temporal relation)及び相似・非相似の如き事実を挙げているのである。

彼が「感覚与件」及び「論理的諸原理」以外に、これらの諸事実を「強固なる素材」として挙げている所以のものは、凡らくこれらの諸事実が単に哲学研究の確実な

る前提として信頼しうるに足るというに止らず、我々の哲学研究そのものに不可欠な手がかりを提供しているからであろう。例えば、我々が現在の世界を探究せんとする場合、我々には「感覚与件」のみならず、これらの「感覚与件」に含まれる時間的・空間的諸関係及び相似・非相似の如き諸事実が、当然研究の不可欠の手がかりとして要請されるであろうし、又我々が過去の世界や心の世界に究明の触手を延ばせんとする場合にも、記憶に於ける過去の「感覚与件」や内省的諸事実としての内官に現われる「感覚与件」が、矢張り研究に必須な手がかりとして要求されるであろうからである。つまり上に挙げた彼のいう「強固なる素材」とは、我々の哲学研究に於ける確実なる素材たると共に、又必要欠くべからざる探求の手がかりでもあるのである。かくして、一見遑大にして多方面に亘る彼の哲学研究も、その出発点は奥にかゝる「強固なる素材」としての、感覚的諸事実及び論理的諸原理に、その「堅固なる基礎」を置いていることを我々は知り得るのである。

- (1) B. RUSSELL: Our Knowledge of the External World, P. 74.
- (2) ibid. P. 75. ff.
- (3) ibid. P. 75. ff.
- (4) ibid. P. 76. ff.

参考文献

1. B. Russell: The Problems of Philosophy, London and New York, 1951.
2. B. Russell: Our Knowledge of The External World, Chicago and London, 1929.
3. B. Russell: Mysticism and Logic, London, 1950.
4. B. Russell: Human Knowledge, London, 1948.
5. C. A. Fritz: Bertrand Russell's Construction of The External World, London, 1952.
6. 新井麗訳: パートランド・ラッセル著 哲学の諸問題